

非対格化と中国語の4つの言語現象
—遊離数量詞、受身、結果複合動詞、“V着”存在文—

山口 直人

Unaccusativization and Four Chinese
Linguistic Phenomena
—Floating Quantifiers, Passives, Resultative Compound
Verbs and “V-zhe” Existential Sentences—

YAMAGUCHI Naoto

内容提要

汉语有两种被动句:

- (1)直接被动句: 张三被(土匪)杀了。
- (2)间接被动句: 张三被(土匪)杀了父亲。

为了统一解释这两种被动句的生成,邓 2004 采取了“作格化”的句法过程。所谓“作格化”是动词失去它对宾语赋予“宾格”能力的语言假设。本稿认为,如果采取“作格化”的句法过程,不但被动句能够得到统一的解释,而且游离数量词、表示结果的复合动词以及“V着”存在句等语言现象也能得到圆满的解释。

目次

0. 問題提起
1. 邓 2004 の「非対格化」分析
2. 「非対格化」に関連した中国語の4つの言語現象
2. 1 遊離数量詞

- 2. 2 受動文
- 2. 3 結果複合動詞
- 2. 4 “V着”存在文
- 3. 「非対格化」分析の更なる利点
 - 3. 1 遊離数量詞の出現位置に関する問題
 - 3. 2 先行詞と遊離数量詞が「全体と部分」の関係を持つことの問題
- 4. 結語

0. 問題提起

生成文法の GB 理論の枠組みによる受動文の生成は、格付与能力を失った動詞の目的語位置にある項が、「格」を得るために文頭位置に繰り上がるという考え方をとる。注 1) たとえば受動文(1)には(2)のような D 構造が考えられる。(2)のままでは“歹徒”は“逮捕了”から格を受け取ることができないので、矢印で示したような文頭への移動が義務的に起こり、そこで格を受け取るわけである。

(1) 歹徒被警察逮捕了。〈悪党が警察に逮捕された〉(作例) 注 2)

(2) [IP [NP e] [VP 被警察 [V [V 逮捕了] [NP 歹徒]]]]



中国語の動詞には英語の受動形のような形態的な特徴は見出せないが、“被”が英語の“by”のような働きをしており、これによって動詞“逮捕了”は目的語“歹徒”に「対格」(accusative case)を与える能力を失うのであろう。

GB 理論による受動文生成の考え方は、同一の枠組みで英語や中国語あるいは日本語といった異なるタイプの言語の受動文を説明することが可能であり、言語普遍性の観点から見て好ましい方向性を持っているといえる。

ところが中国語には目的語位置に項が残る“间接被动句”と呼ばれるタイプの受動文がある。

(3) 张三被(土匪)杀了父亲。〈張三は(匪賊に)父親を殺された〉(邓 2004 291 頁)

例文(3)のようなタイプの受動文は(2)の枠組みに対する反例のように思えるが、邓 2004 はこのタイプの受動文が、動詞の「非対格化」によって生成されると主張している。もしも邓 2004 の考え方が正しいとすれば、(3)の目的語位置に残った“父亲”は非対格化した動詞から「部分格」(partitive case)を得ることになる。

非対格動詞文と受動文の類似性はたびたび指摘されているが、山口 2005 は中国語においては非対格動詞文との類似性が、受動文のみならず結果複合動詞と“V着”存在文においても存在し、それらの類似性は遊離数量詞現象によって明確に観察できることをみた。

本稿では邓 2004 の「非対格化」の考え方に立てば、中国語の遊離数量詞現象において未解決であった2つの問題：

(i) 中国語の遊離数量詞はなぜ文末にしか現れないのか？

(ii) 中国語の遊離数量詞現象において、なぜ先行詞と遊離数量詞の間には「全体と部分」の関係が存在するのか？

に対して的確な回答を得ることができることをみる。

1. 邓 2004 の「非対格化」分析

例文(3)でみたように、中国語の受動文にはGB理論の枠組みに反するように見える例がある。邓 2004 は受動文を(i)“直接被动句”と(ii)“间接被动句”に二分する(291頁)。

(i) “直接被动句”

(4) 张三被(土匪)杀了。〈張三は(匪賊に)殺された〉

(ii) “间接被动句”

(5) 张三被(土匪)杀了父亲。〈張三は(匪賊に)父親を殺された〉(= (3))

(4)において文頭の“张三”は動詞“杀了”の直接の対象であるが、(5)において“张三”は動詞“杀了”の間接的な対象(おそらくは経験者)でしかない。

“杀了”の直接的な対象は“父亲”である。

邓 2004 は中国語の受動文に見られる(i)と(ii)の違いを統一的に扱うために、

“作格化”(ergativization:「非対格化」)の考え方を提案している。「非対格化」は「非対格性の仮説」(unaccusative hypothesis)にもとづく考え方で、動詞が「非対格化」することによってその動詞が目的語に対格を付与する能力を吸収されてしまうという考え方である。このため非対格化した動詞の目的語は「格フィルター」(注1参照)を満たすために、何らかの形で格を得る必要があるが、邓2004によればそれは以下の2つであり、この違いが(i)“直接被动句”と(ii)“间接被动句”の差を生むと主張している。

(i)目的語を文頭に移動する＝“直接被动句”

(ii)目的語位置に残った名詞句に部分格(partitive case)を付与する＝“间接被动句”注3)

次章では邓2004の「非対格化」の考え方に従えば、受動文だけではなく遊離数量詞、結果複合動詞、“V着”存在文といった現象がすべて統一的に説明できることをみる。

2. 「非対格化」に関連した中国語の4つの言語現象

「非対格性の仮説」によれば自動詞には：

(i)その動詞の主語が本来的に主語位置(つまり文頭の位置)に存在する「非能格動詞」と

(ii)その動詞の主語が本来的には目的語位置に存在したが、動詞がその主語名詞句に対格を付与する能力を欠くために、その主語名詞句が文頭位置に移動することによって「格フィルター」を満たす「非対格動詞」の2つがあるとされる。注4)

影山1993(54頁)によれば、日本語の「たくさん」という言葉はV'内の要素しか修飾できないという。ということは「たくさん」の修飾できる要素は動詞か動詞の姉妹節点ということになり、非能格動詞の「歩く」と非対格動詞の「来る」では「たくさん」の修飾対象に違いが生じるという。(以下の例はNiinuma2005 54頁)

(6)たくさん歩いた＝「歩いた時間、回数がたくさん」であって、「歩いた人

がたくさん」ではない。

(7) たくさん来た = 「来た人がたくさん」

(6)の非能格動詞「歩く」において「たくさん」は「歩く」の主語を修飾できないことから、「歩く」の主語はV'よりも階層的に高い位置にあることが分かる。一方(7)の非対格動詞「来る」において「たくさん」は「来る」の主語を修飾できることから、「来る」の主語はV'内の位置、つまり「来る」の目的語位置にあることが分かる。以下、こうした非対格性の仮説を支持すると思われる中国語の4つの言語現象をみることにする。

2. 1 遊離数量詞

下の(8)(9)は“三个”が前の名詞句と意味的に結びつき得るか否かに差がある。

(8) 学者从直辖市来了三个。〈学者が直辖市から3人来た〉

(9) *学者从直辖市来了三个。〈*学者が直辖市から3つ来た〉(以上作例)

日本語の遊離数量詞についてはMiyagawa1989がGB理論の枠組みで「相互c統御条件」にもとづく一般性の高い説明を行っている。山口2005はMiyagawaの分析が中国語の遊離数量詞についても有効であることを主張した。

Miyagawa1989の「相互c統御条件」とは大略以下のように定義される。

(10) 数量詞(またはその痕跡)とそれが修飾する先行詞(またはその痕跡)は互いに「c統御」していなければならない。

(8)(9)にかかわるS構造は以下のようになると思われる。

(8) ' [IP 学者 i [VP [PP 从直辖市] [VP [v' 来了 三个 ti]]]]

(9) ' * [IP 学者 i [VP [PP 从直辖市] [VP [v' 来了 三个 ti]]]]

ここで重要なのは先ほど(7)でみたように「来る」(中国語は“来”)という動詞は非対格動詞であり、その主語は本来は“来”の目的語位置に生成されるが、「格フィルター」を満たすために文頭に繰り上がるという「非対格性の仮説」

である。(8)に相当する(8)'において数量詞“三个”とその先行詞“学者 i”の痕跡 t_i は V' 節点内で相互 c 統御条件を満たしており、適格文であることが正しく予測される。同様に(9)に相当する(9)'において数量詞“三个”とその先行詞“直辖市”は PP 節点や VP 節点が邪魔をして相互 c 統御条件を満たしておらず、不適格文であることが正しく予測される。

このように中国語の遊離数量詞の振る舞いを正しく解釈するためには、「非対格性の仮説」が不可欠であることが分かる。

2. 2 受動文

序章でみたように GB 理論の枠組みでは(11)には(11)'のような S 構造が考えられる。

(11) (有) 两个歹徒被警察逮捕了。〈2 人の悪党が警察に逮捕された〉注 5)

(11)' [IP 两个歹徒 i [VP 被警察 [v' [v 逮捕了] [NP t_i]]]]



こうした受動文の生成過程は前節でみた非対格動詞文の生成と極めて似ていることが分かる。つまり非対格動詞文も受動文も、ともに本来動詞の目的語位置に生成された「主語」が、「格フィルター」を満たすために文頭に義務的に移動しているという点で共通している。そしてその証拠に受動文でも非対格動詞文の(8)でみたような遊離数量詞現象が観察できる。

(12) 歹徒被警察逮捕了两个。〈悪党が警察に 2 人逮捕された〉

(12)' [IP 歹徒 i [VP 被警察 [v' [v 逮捕了] [NQ 两个] [NP t_i]]]]



(12)'において邓 2004 のいう「非対格化」が起こっていると考えると、“歹徒”は文頭に繰り上がって格を得る一方で、非対格化した“逮捕了”の目的語位置に残留した“两个”は“逮捕了”から部分格を得ると考えられる。

数量詞遊離を伴う受動文をこのように考えると、これは邓 2004 の挙げる“间接被动句”(例文(3)参照)と極めて類似した現象といえる。

2. 3 結果複合動詞

2.1 節と 2.2 節でみたように、本来動詞の目的語位置にあった項が文頭に繰

り上がって文主語として働いている場合には、そこに何らかの形で「非対格化」が起こっている可能性があり、遊離数量詞の可否がそのことを確かめる一つのテストになりうる。

中国語には前項動詞 V1 と後項動詞 V2 を併合し、複合動詞を作る造語法が発達している。注6) 中国語ではこうした V1V2 構造は伝統的に「結果補語」と呼ばれ、一般に V1 の表す動作・行為が V2 の表す状態や結果を導くことを表す。

木村 1981(24 頁)が指摘するように、中国語の V1V2 結果複合動詞には「受け手優位の原理」ともいふべき原則があり、結果複合動詞が表す意味は受け手側の結果を強く指向することが知られている。このことはとりもなおさず、V1V2 結果複合動詞では、本来目的語であった項が主語位置に繰り上がって自動詞文を作ることが容易であるということに他ならない。

(13) 我们战败了敌人。〈我々は敵を戦って負かした〉

(13)' 敌人战败了。〈敵は戦って負けた〉

(14) 她哭红了眼睛。〈彼女は目を泣いて赤くした〉

(14)' (她的)眼睛哭红了。〈(彼女の)目は泣いて赤くなった〉(以上山口 1991 118 頁)

上の例の(13)(14)では他動詞として機能していた V1V2 が(13)' (14)' では「非対格化」により自動詞化しており、(13)(14)で目的語であったものが、(13)' (14)' では主語として働いている。このことはこうした自他両用の V1V2 結果複合動詞が遊離数量詞を許すことから確認できる。

(15) 小红跑丢了一只鞋。〈小紅は片方の靴を走っているうちになくしてしまっ
た〉

(15)' (小红的)鞋跑丢了一只。〈(小紅の)靴が走っているうちに片方なくなっ
てしまった〉(以上山口 2005 125 頁)

2. 4 “V 着” 存在文

中国語には動詞が動態助詞の“着”と併合して“V 着”という構造を作り、存在を表す文型がある。宋 1992 はこうした“V 着”存在文を(i)「動態存在文」

と(ii)「静態存在文」に二分している。

(i)「動態存在文」:

(16) 小路上走着五个老人。〈小道を5人の老人が歩いている〉

(ii)「静態存在文」:

(17) 院子里种着三棵柳树。〈庭に3本の柳の木が植わっている／植えてある〉(以上、例文は林 2002 98 頁 日訳は山口)

(i)「動態存在文」である(16)が表すのは「意味上の主語であり、動作主である“五个老人”が現在おこなっている動的な行為」である。一方(ii)「静態存在文」である(17)が表すのは「文に現れていない動作主の動作の対象である意味上の主語“三棵柳树”の現在の結果状態」である。

(16)(17)にはともに文末の意味上の主語を文頭に移した文型が存在する。

(18) (有)五个老人在小路上走着。〈5人の老人が小道を歩いている〉

(19) (有)三棵柳树在院子里种着。〈3本の柳の木が庭に植わっている／植えてある〉(作例)

(18)の“走”(歩く)は先に(6)でみたように非能格動詞と考えられる。ということは、数量詞の“五个”を遊離して文末に置いた文は Miyagawa1989 の相互 c 統御条件を満たさず非文になることが予測されるが、事実はそのとおりである。

(18)' *老人在小路上走着五个。〈*老人が小道を 5人歩いている〉

一方(19)の“种”(植える)は本来他動詞であるが、(19)においては“着”を伴い“种着”となることによって、自他両用の動詞となっている。更に文頭の“三棵柳树”は動作者ではなく、本来は動詞“种”の目的語であった。ということは、(19)には一種の「非対格化」が起こっていると考えられる。もしそうであれば(19)は数量詞の“三棵”を遊離して文末においても、Miyagawa1989 の相互 c 統御条件を満たして適格文になることが予測されるが、事実はそのとおりである。

(19)' 柳树在院子里种着三棵。〈柳の木が庭に 3本植わっている／植えてある〉

(以上、例文(18)' (19)' は林 2002 98 頁。ただし、例文は一部を変えた。日訳は山口)

3. 「非対格化」分析の更なる利点

前章の議論で、邓 2004 の「非対格化」を想定すれば、中国語の受動文だけでなく、結果複合動詞と“V 着”存在文も統一的に扱うことが可能であり、このことはすべて遊離数量詞現象の可否によって証明されることをみた。

邓 2004 の「非対格化」の考え方を採用すれば、山口 2005 で未解決であった中国語遊離数量詞に関する 2 つの問題に対しても的確な解答を得ることができる。

3. 1 遊離数量詞の出現位置に関する問題

はじめに、なぜ中国語では遊離数量詞は文末にしか現れないのかという問題を考えてみる。(以下、例文は山口 2005 より)

(一) 日本語：

(i) 非対格動詞主語

(20) 3 人の学者が北京から来た。(遊離なし)

(21) 学者が3 人北京から来た。(主語の直後)

(22) 学者が北京から3 人来た。(動詞の直前)

(ii) 他動詞目的語

(23) 学生が3 冊の本を燃やした。(遊離なし)

(24) 学生が3 冊 本を燃やした。(主語の直後)

(25) 学生が本を3 冊燃やした。(動詞の直前)

(26) 3 冊、学生が本を燃やした。(文頭)

日本語ではこのように遊離数量詞の出現には多くのパターンがあり、文中のさまざまな位置に現れうる。

(二) 中国語：

(i) 非対格動詞主語

(27) (有)三位学者从北京来了。(遊離なし) (3 人の学者が北京から来た)

(28) *学者 三位从北京来了。(主語の直後に遊離数量詞は現れない)

(29) *学者从北京三位来了。(動詞の直前にも遊離数量詞は現れない)

(30) 学者从北京来了三位。(文末)〈学者が北京から3人来た〉

(ii) 他動詞目的語

(31) 他烧了三本书。(遊離なし)〈彼は3冊の本を燃やした〉

(32) 他烧书烧了三本。(文末)〈彼は本を(燃やすにあたって)3冊燃やした〉

(33) 他把书烧了三本。(文末)〈彼は本を3冊燃やした〉

(34) 他书烧了三本。(文末)〈彼は本は／を3冊燃やした〉

(35) 书，他烧了三本。(文末)〈本は／を彼は3冊燃やした〉

一方中国語では、(27)～(35)から分かるように遊離数量詞の出現位置は文末に限られる。

邓 2004 の「非対格化」の考え方に従えば、この現象について適切な答えを得ることができる。つまり、「非対格化」によって動詞がその目的語に対格を付与する能力を失ってしまうと、その目的語は格を得るために文頭、あるいは前置詞“把”の目的語位置への移動が義務的となる。よって中国語においては数量詞の遊離現象は動詞の目的語位置に生成される非対格動詞主語と他動詞目的語にだけ起こることになる。注 7) ということは、その移動する名詞句と相互 c 統御条件を満たす数量詞が格を得るには、非対格化した動詞の直後の位置にそのまま留まり、部分格を受け取るしかない。こうした理由から中国語では遊離数量詞は必ず動詞直後の文末位置に現れるのである。

3. 2 先行詞と遊離数量詞が「全体と部分」の関係を持つことの問題

中国語は(i)非対格動詞主語の場合も(ii)他動詞目的語の場合も、その先行詞と遊離数量詞の間には「全体と部分」の関係が存在する。例文(30)(32)(33)(34)(35)を参照されたい。

これについては3.1節ですでにみたように、動詞の「非対格化」により文末に残留した遊離数量詞には「部分格」が与えられる。よって中国語においては、先行詞と遊離数量詞の間には「全体と部分」の関係が成り立つのである。

4. 結語

以上の考察から、中国語において邓 2004 の「非対格化」の考え方を導入すれ

ば、受動文だけではなく、結果複合動詞、“V着”存在文についても統一的な説明が得られることが分かった。そしてこのことは受動文、結果複合動詞、“V着”存在文において、遊離数量詞現象についてまったく同じ結果が観察できることから証明される。邓 2004 の「非対格化」の考え方は、さらに中国語の遊離数量詞に関して未解決だった 2 つの問題についても、適切な回答を得ることができる。

(2005. 9. 11)

注

- 1) これは「音形を持つ名詞句は格を持たなければならない」という考え方にもとづいており、「格フィルター」と呼ばれる。
- 2) 本稿で挙げた用例は出典を明記したもの以外は筆者の作例であるが、すべてインフォーマント・チェックをしてある。
- 3) 非対格動詞がその補部に部分格を付与するという考え方は Belletti 1988 にみられる。
- 4) この記述は「動詞句内主語仮説」の観点からは正確さを欠く。「動詞句内主語仮説」にもとづく非能格動詞と非対格動詞の分析については山口 2005 注 5 を参照のこと。
- 5) こうした数量詞を伴う不定主語が文頭に立つとき、文頭には“有”が現れるのが普通である。この“有”の扱いには諸説あるが、本稿では「不定主語マーカ―」と考えておく。
- 6) 後項には動詞だけでなく形容詞が来ることもあるが、便宜上「後項動詞」と呼び、「V2」としておく。
- 7) 本稿ではまだ憶測の域を出ないが、いわゆる“把”構文も「非対格化」の一種と考えれば、受動文同様に本来他動詞の目的語位置に生成した項が、斜格 (oblique case) を得るために前置詞“把”の目的語位置に義務的に移動する操作として解釈することができる。

〈主要参考文献〉

- Belletti, Adriana 1988 「The Case of Unaccusatives」 『Linguistic Inquiry』
19 1-34
- 邓 思颖 2004 「作格化和汉语被动句」 『中国语文』 第4期 291-301页
- 影山太郎 1993 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 木村英樹 1981 「付着の“着” /zhe/と消失の“了” /le/」 『中国語』 7月号
17, 24-27頁
- 林 璋 2002 「中国語の数量詞とアスペクト」 『日中言語対照研究論叢』 第4
号 91-105頁：白帝社
- Miyagawa, Shigeru 1989 『Syntax and Semantics 22 : Structure and Case
Marking in Japanese』 New York:Academic Press
- Niinuma Fumikazu 2005 「Unaccusativity and Honorification in Japanese」
『Gengo Kenkyu』 127 51-81
- 宋 玉柱 1992 『现代汉语语法基本知识』：语文出版社
- 山口直人 1991 「動補動詞の類型と形成について」 『中国語学』 第238号
115-124頁
- 2005 「中国語の遊離数量詞」 『日中言語対照研究論叢』 第7号 114-131
頁：白帝社